

# 人をつなぐ「お宝」大発見

◀大学生と交流を深める奥小野はす同好会の皆さんと話を伺った神谷さん(後列右から4番目)、奥谷さん(前列右から3番目)



▶きな粉あめづくり作業後に話をつなぐ地域の皆さん(左)と特産品部長の近本さん(右)

市では、地域を守り将来につなぐため、地区公民館の範囲での地域づくりを行う「新しい地域コミュニティ」を推進しています。

平成29年4月から、公民館が「コミュニティセンター(仮称)」に一齐に変わることから、順次、モデル地区として、その準備を進めています。

多くのモデル地区では「ワークショップ」や「まちあるき」が行われています。これは、地域の課題や魅力を発見し、地域の活動につなげようとする取り組みです。

その中で見えてくる地域資源は、人と人をつなぐ「お宝」として、地域コミュニティで守っていく財産でもあります。今回は、合橋地区の「きな粉あめづくり」と奥小野はす同好会の「農地を活かした活動」を紹介します。

## 地域の味を未来へつなぐ (合橋地区(但東地域))

合橋地区のコミュニティ組織「合橋地域づくりの会」では、きな粉あめづくりを実践しています。この取り組みを特産品生産部長の近本賢一さんと部会員の皆さんに伺いました。

—きな粉あめづくりを始めたきっかけは？

**近本** 今から約40年前、合橋生活改善グループが、きな粉あめづくりを始めました。このきな粉あめは、今でも合橋地区の自慢です。

40年続くモノは「いいモノ」だと確信しています。「いいモノ」であるきな粉あめを将来に残していくために、地元産大豆を使用するなど、素材にこだわったオリジナルのあめづくりを始めました。

—なぜ合橋生活改善グループと同じ商品をや？

**近本** 合橋生活改善グループは目的を持って活動しており、私たちはこれまでから協力関係にあります。しかし、同グループは高齢化しており、

きな粉あめの味が途絶えるのではと懸念しました。同じ商品を作るのは同グループの活動を尊重することと、自慢の味を残すことの両方を考えたためです。

—メンバーは？

**近本** 合橋地区内の男女6人です。誰もこれまで食品加工をしてきた経験は特になく、レシピは合橋生活改善グループの方々に教わりました。

—今年1月から販売を開始。今後の展望は？

**近本** もう少したくさん売ってほしいので、販路を開くことを考えていますが、難しいですね。若い人の声を聞くともう少し柔らかい商品の方が好まれるようで、バリエーションを増やすため、試行錯誤の毎日です。

「もう少したくさん売ってほしい」というのは、金儲けをしようという発想ではないですよ。加工に来るメンバーは、楽しみにしています。だから、ほんの少しだけ「心地いい程度の忙しさで」楽しむ機会が増えればと思います。

また、多くの人にきな粉あめを知ってもらい、買ってもらうことが、合橋の味を守ることになるかと確信しています。



▲きな粉あめづくり

―特産品生産部の皆さんの声  
▽同じところに住んでいてもなかなか、こうやって集まることもないから楽しい。  
▽楽しいから時間が過ぎるのが早い。  
▽もう少しだけ忙しくなってもいいかな。  
▽作業が終わってからの語り合いが楽しい。  
きな粉あめづくりを通して人と人がつながり始めている様子でした。

**遊休農地を  
人を呼び込む資源に再生  
〔奥小野集落(出石地域)〕**

出石町奥小野集落では、平成13年に、集落内の有志「奥小野はす同好会」をつくり、平成15年から「はす祭り」を実施しています。

―昨年からは、ハスづくりやはす祭りの作業運営に大学生の参画があり、地域資源を絶やさずない取組みをしています。

―新しい地域コミュニティ単位の活動ではないものの、地域資源を活かしたコミュニティの取組みです。奥小野集落の取組みを、奥小野はす同好会代表の神谷進武さんと前代表の奥谷栄次さんに伺いました。

―ハス園をつくるきっかけは？

**奥谷** ハス園になつてはいる田んぼは、乾きが悪く、耕作されないため、草が生い茂っていました。平成13年、当時の区長さんの一声がきっかけでした。「集落の入り口の田んぼだし、見苦しくなってしまう。山奥の集落が本当に山奥になつてしまふぞ」と。

**神谷** それがかきつかけで、同

好会が立ち上がりました。当時は5、6人でスタートしたと思います。現在ではその考えに賛同した人たちが集い、男性23人、女性16人(30戸)による活動に発展しています。

―はす祭りの手伝いの後、会員の手作り料理を囲んでの懇談や集落内の散策、ワークショップなどで交流ができました。

―長く事業を続ける秘訣は？

**奥谷** 区の総会で「区の事業にしては？」と同好会以外の方からのありがたい声はいたっています。しかし、区の方々に負担を掛けます。今は同好会で頑張っています。

―大学生との交流で変化は？

**神谷** 同好会には若い人が少なく、会員も段々と高齢化するため、作業が大変です。正直、事業の継続は重荷ですが、一年、一年できる範囲で楽しみながら続けています。そんな中で、大学生の作業ボランティアに、後押しをしてもらっています。

―ワークシヨップで集落のことを語ってもらいました。獣害対策ネットを見て「人がこれを飛び越えて、田んぼに飛び込む大会をしたら面白そ

―大学生とはどんな交流を？



▲大学生によるはす祭りでの販売風景(左)とハス園の除草作業(右)

**地域  
コミュニティ**  
地区(公民館単位)の取組み  
《問合せ》コミュニティ政策課 ☎21-9020

**地域づくりはチャレンジ**

「あるモノを守る」「交流により新しいつながりを持つ」など、地域それぞれの工夫がキーポイントです。地域の「困りごと」の解決が新たな「お宝」になる場合もあります。地域の魅力は、少し視点を変えることで見えてくるのではないのでしょうか。